

現代の父子関係についての一考察

- 男性性と親密さをめぐる社会的（ホモソーシャルな）関係から -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
高井 陽一

父親と息子の関係はホモソーシャルな関係である。その父親と息子の関係について、擬制として同じくホモソーシャルな関係である「先輩」「後輩」関係を仮定して論じた。この「先輩」「後輩」関係が父親と息子の間でどのように展開しているかについて、第一調査として20代男性の息子に対して調査し、第二調査として50代男性の父親に対して調査した。

第一調査では、父親との会話の有無を中心に、父親との関係や父親の役割、父親への評価に関してインタビュー調査を実施し、その結果として、息子は父親に対して「対等以上」の立場で語っていたが、父親に相談をすることによって、その立場は「対等以上」から「後輩」へと変化していることがうかがえた。その結果から、息子は父親から男性性を受け継いでいく可能性と企業社会で働く父親の公私の分離、中産階級における金銭的な援助の見えにくさが息子を「対等以上」な立場にさせてしまうことが考えられた。

第二調査では、小さい頃から現在までの息子との関係、また上の世代である自分の父親との関係とその評価に関してインタビュー調査を実施し、その結果として、父親は息子に対して「共同体験」「後衛」「指南」「注意」「衝突」「容認」「命令」「おごり」「対話」を行っていることがうかがえた。そして、その背景には、仕事との折り合い、自分の体験、他者の影響、自身の父親との関係、後輩との接触経験があることがうかがえた。また、父親は上の世代から父親像を反抗する形や受容する形で受け継いでいることがうかがえた。

総合考察として、父親と息子の世代間において父親像が受け継がれていく可能性、父親と息子の会話のないことは積極的な指導をする父親に反抗した父親が陥る一つの落とし穴である可能性が示唆された。また、父親と息子の「距離感」や「照れ」といった現象は男性同士の親密さの障害が生む「距離感」であり「照れ」であると考えられ、これは父親と息子の相互に作られていることが示唆された。

そして、父親と息子の「照れ」や「距離感」があるために、社会的に共有されている「父親と酒を飲む」という幻想が流布していることが考えられた。このような「照れ」や「距離感」をなくすためには、父親は「先輩」としてあり続けるだけでなく、時には「対等」として息子から話を聞く必要性が考えられた。また、息子は「対等以上」として父親と話すだけでなく、時には「後輩」へと立場を変化し、「先輩」から話を聞く事が必要であることが考えられた。そして、父親と息子が擬制的になるのは男性の親密さへの障害から生じる距離をとった関わり方のためであり、男性性を伴った上で気遣いや配慮といった友愛的な関わり方を息子に行うことによって、父親は父親として成立することになると考えられた。